

京都大学国文学論叢 第十三号 正誤表

【訂正箇所】17頁 下段  
7行目「としてゐる」→15行目「の用例がある。」  
ま  
でを削除

【誤】  
としてゐる。確かに、宗祇流の注釈書には「三句め」  
の指摘を見ることはできないが、創作の場では、三句の移  
りについて様々な配慮がなされていたはずである。例えば、  
永正三年（一五一三）の『牡丹花月村兩吟百韻』の注や、  
大永二年（一五二二）の『伊勢千句』の諸注は、注者、加  
注の時期とも不明ながら、肖柏、宗長、宗硯ら、宗祇直弟  
子の「三句め」の工夫を解き明かしてくれている。  
一方で、宗祇と同時代の兼載には、その著書や聞書に「三  
句め」の用例がある。としてゐる。確かに、残された

【正】  
としてゐる。確かに、残された

## 兼載「三句め」の技法

長谷川千尋

### 一 はじめに

連歌は、打越・前句・付句の三句を単位として展開する。付句は、前句によく付くと同時に、打越から離れていなければならぬ。すなわち、打越と前句は一体となつて一つの世界を構成するが、次の句を付けるときには、前句を打越に結びつけていた連想の糸を完全に断ち切つて、前句と付句とで新しい連想の世界を紡ぎ出さなければならないのである。宗長の『五十七ヶ条』に、こんな一節がある。

一、三句め離るるとは、打越を捨ててする事也。さてこそ人の連歌を笑に、よく付候、打越迄付候、と笑候は、三句めを知りたる句のことにて候<sup>(一)</sup>。

「三句め」という言葉は、連歌用語として成熟しており、連歌論書の他、百韻・千句の古注釈に、この句は「三句め」である、という類の指摘を見ることがある。「三句め離る

る」という原則はつきりしているのだが、個々の指摘が、三句間の具体的な関係のどこを指して言っているのかという点になると、実はよく分からない場合もある。

金子金治郎氏は、連歌の古注釈史を大きく展望する中で、付合の解明に専らであつた注釈活動が、三句の移りなどの行様に目を向けるようになるのは、宗牧の時代以降であるとしている<sup>(二)</sup>。確かに、宗祇流の注釈書には「三句め」の指摘を見ることはできないが、創作の場合は、三句の移りについて様々な配慮がなされていたはずである。例えば、永正三年（一五一一）の『牡丹花月村雨吟百韻』の注や、大永二年（一五二二）の『伊勢千句』の諸注は、注者、加注の時期とも不明ながら、肖柏、宗長、宗硯ら、宗祇直弟子の「三句め」の工夫を解き明かしてくれている。

一方で、宗祇と同時代の兼載には、その著書や開書に「三句め」の用例がある。としている<sup>(三)</sup>。確かに、残された

宗祇流の注釈書には「三句め」の指摘を見ることはできないが、創作の場では、三句の移りについて様々な配慮がなされていたはずである。例えば、永正十年（一五一一）の『牡丹花月村雨吟百韻』の注や、大永二年（一五二二）の『伊勢千句』の諸注は、注者、加注の時期とも不明ながら、肖柏、宗長、宗硯ら、宗祇直弟子の「三句め」の工夫を解き明かしてくれている。

一方で、宗祇と同時代の兼載には、その著書や聞書に「三句め」の用例がある。また、明応三年（一四九四）の兼載独吟『聖廟千句』に対して、古注は、多く「三句め」の指摘を行っている。『聖廟千句』の古注は第一種から第四種までの四種類が現存する<sup>三〇</sup>。そのほとんどは注者未詳とすべきものであり、千句と同時代に成立したものとは限らないが、吟味して使えば、兼載の意図を知る有力な手掛かりになる。こうした点に注目して、兼載の連歌における「三句め」の意識について、考察してみたいと思う。

## 二 「三句め」

まず、古注釈全般において、どのような場面で「三句め」の指摘がなされているのかを、以下に整理しておく（以下、「三句め」の用例に私に傍点を付した）。

a. 同じ素材が二句続き、三句めで離れなければならないとき

56 のころ日うすき雨のどかなり 牧(夕)

57 鐘遠き山やいくかもかすむらん 同(夕)

58 あかつきばかりすむ空もなし 長(夜)

（前略）夕の眺望二句つゞき待れば、三句め大事なるを、暁いかにも閑なるに、ほのかに鐘の聞えたるは、いくかもかわらむ斗なる山成べしと察したる心也。かすむと云詞、よるなどまではつかぬ物なり。誠の手がらなるべし。

宗牧『矢嶋小林庵百韻注』<sup>三〇</sup>

また、同じ素材が二句続いた後の三句めで展開させるといふ、その働きの方に重点が置かれると、次のbのように、それまで続いてきた句数に関わらず、「三句め」が用いられるようになる。

b. 前から続いてきた素材を離れ、句境を展開させるとき

18 いつつ花すゝきなびくをもみん (恋)

19 いたづらにおもひ入野々露深み (恋)

20 やどりをとへば人里もなし (旅)

21 世中や昨日今日にもかはるらん (述懐)

22 いとなむ年のあけがたの春 (春)

（前略）恋しゆつくはいなどのあまたつゞき待る、三句めをば、かやうにやるべしとぞ申侍る。

『聖廟千句』第一種注

恋、述懐などの重い素材が続き、流れが停滞しかかっていたところ、22句で春に転じたという場面である。「三句め」とはあるが、22句は、18句の恋から数えて五句めである。抑も「あまたつゞき侍る三句め」という矛盾した表現を成り立たせていることから分かるように、この「三句め」は、本来の数詞の働きを失って、ただ、前から続いてきた素材を、別の素材に転換させる句の意味で用いられている。

18 夢さへたえぬたへんものかは (恋)

19 忘るゝは恨ざらめやいかゞせん (恋)

20 身をしるもはた折にこそよれ (恋)

21 句ひくる花にやふれん墨の袖 (春)

恋の三句めなれば、かくいへり。法鉢の、花にも執心すまじきと思ふも折にこそよれと也。

『天文十四年四月十六日宗牧独吟百韻自注』<sup>三</sup>

21句は、恋が三句続いた後の四句めである。「恋の三句め」とは、恋の句が続いて、恋離れをするべき場面で展開させた句ということであろう。

c. 打越と前句が寄合や本歌本説によって緊密に結び付き、それによって三句めの付筋が限定されてしまうとき

吉野に桜や花付べし。花、桜といふ句に吉野をはい

やにて候。おなじく宮城野に小萩はおもしろし。又、小萩に宮城野はいやにて候。至なき下手の好む寄合也。かやうに付て三句め大事なるべし。兼載『梅春抄』<sup>五</sup>名所の句に、その名所の寄合語を付ける(吉野に花)のはよいが、その逆をすること(花に吉野)は嫌われる。三句めを付けるのが困難になるからである。『二根集』に、萩に宮城野を付けた実例があるので、三句めにどのような制約が生じるのかを見てみよう。

なみだ落そふ萩の上露

宮城野をあはれのはてか狩衣

つたへてきくも遠き東路

此句、不付候。三句めもよろしからず。又、爰にて返り句に、ともしをせし人有。猶よろしからず。萩ときて宮城野と付、又、ともしなど候へば、三句め、懷紙面わろし。哀のはてかと候に付候へば、宮城野も、をのづから付候なり。是、連歌のならひに候。旅衣たつ曉の別より、などの歌の心、よく候はん。毎句、此心持有べし。<sup>五</sup>

打越と前句が萩と宮城野の寄合で付いている場合、付句では、「ともし(照射)」等の宮城野の寄合<sup>五</sup>は使えない。打越と前句、前句と付句がどちらも宮城野の寄合で付くのは輪廻にあたるからである。「東路」は寄合でこそないが、

宮城野のあしらいである以上、これも良くないという。この状況で「宮城野をあはれのはてか狩衣」の句に付けるには、宮城野をあからさまに連想させるような言葉は一切使わずに、宮城野の風情に相応しい句を付けよ、という難題に答えなければならぬ。ここでは、前句の「あはれのはてか」に付けば、「旅」ころもたつ曉の別れよりしをれしはてや宮城野の露」（三体和歌・四二・鴨長明）の歌の心で、自然に宮城野にも付くという打開策が示されている。実際、この方法は妥当なものであったようで、宗牧の注にも次のように見えている。

30 さざれ石まのふかき山水 牧

31 みねの雪かげまで寒しちくま川 雪

32 朝日にかゝるよるのむら雲 牧

（前略）名所の三句め、直に申旧候様に、寄合共さし合候へば、何時も心斗にて可付事とぞ。

宗牧『住吉法樂何船百韻注』<sup>(5)</sup>

打越と前句は、「さざれ石」と「ちくま川」の寄合<sup>(5)</sup>で付いている。従って付句では、千曲川の寄合が使えないため、「みねの雪かげまで」を付所にして、朝日に懸かる村雲を詠出し、千曲川の辺りの情景に見立てているのである。

以上は名所寄合の例であったが、本歌本説の場合も事情は同じである<sup>(11)</sup>。

44 うつゝか夢かめぐりあふとも 同（牧）

45 するがなる山路すづろに行く 同

46 みるめもかなしとをき海づら 梅

行く／＼てみるめもと、うけたる句也。物語の心きたれば、三句め必つまり侍る事にや。やすく／＼として、しかもよく付侍るにや。するがの海とふるく読ならはせり。

宗牧『梅牧両吟朝何百韻注』<sup>(12)</sup>

打越と前句は『伊勢物語』第九段の翻案である。一句としても物語の気配が濃厚なこの前句に、付句はそれを離れて付けなければならぬため、漠然と駿河の山路から見た海の景色を付けて逃れている。

「三句め」の指摘は、百韻・千句の長連歌を対象とした古注釈ばかりではなく、長連歌から二句の付合を切り取った付句集においてさえも見られる。当時の人が、付句集を見るとときにも、長連歌の行様を想定していたことは、寺島樵一氏の「連歌付句集における「行様」——前句のなかの打越・付句の中の三句目——」<sup>(13)</sup>に論じられている。次に挙げるのは、『竹林抄』に採録された心敬の句である（なお、『景感道』『竹聞』は、ともに兼載の講釈に基づく資料）。

枕にはちよしとこそいへ

まどろまじ夢に問来る人や見ん

しるといへば枕だにせでねしものを塵ならぬ名の空に

たつらん 三句め大切の所を、まどろまじといふ、奇妙也。『景感道』<sup>千一</sup>

わがねてゐたらば、夢にくる人のさてもねてゐたると、あさくみをとされんと也。然而ねたる枕なれば、はぢよと也。しるところとは、人のしらんと也。

『竹間』<sup>千五</sup>

『景感道』が「三句め」を問題にするのも、いまある二句の付合を通して打越を想定しているからである。「枕に恥じなさい、枕は人の心を知ると言うから」という前句は、「しるといへば枕だにせでねしものを」の本歌（古今集・六七六・伊勢）に強力に支配されている。そのため、打越がどのような句であつたにせよ、打越と前句で作る付合の世界は、結局は本歌に則したものにならざるを得なかつたと推測できる。さらに、心敬が、殊更に本歌を突き放すような付け方をしている所を見れば、打越と前句が本歌で付いていたという察しは付く。

「三句め大切の所」とは、すなわち、本歌を離れて付けねばならぬ困難を言っているのであり<sup>千六</sup>、心敬は、前句の「しる」を、枕が知る意から夢に訪れた恋人が知る意に転じて、全く別の方向に展開させることに成功している。

さて、打越と前句が寄合や本歌本説によつて結び付いているcの場合や、恋や述懐などの素材に関わるa bの場合

の「三句め」は、比較的理解しやすいいと言える。問題は、a b cのいずれにも属さない「三句め」の用例である。

何事か人の詞にもれぬらん

あひもあはずも名は立にけり 宗砌

何事をも人はひはんする物なればなり。三句めの句也。

『竹間』

この例について、寺島氏は「三句目は後続の句に對し、そこまで続いてきた主題を転換するための橋渡しの役目をもつ。例えば三句目に恋を季あるいは述懐、旅などへ転換する、両義的な句を意図的に付けることが多い」として、次のように説明する。

上の宗砌の句で言えば、前から続いてきた恋句を受けて、「(恋人)に逢うのも逢わないのもどちらにしても噂は立つてしまうものだ」という前句へ繋がる意味に、恐らく「(時)に遇う人も遇わぬ人も、何かにつけ評判が立つものだ」という一句の意味を重ねて、句数の上で行き詰まった恋句から他の主題の句へ逃れる役目をする。

宗砌の「あひもあはずも」の句が、「恋人に逢う」と「時に遇う」の両義性を持つという解釈は魅力的だが、この句を解釈する以前に、前句の「何事か人の詞にもれぬらん」を恋の句としてよいものかどうかが気になる。一句には恋

の詞に相当するものがない。また、類句を探してみると、『壬生宛宗長連歌自注』に、

つねにかたるやあひ思ふどち

人ことも世にもるべきは心して （十）

という句があるが、これは雑の句の並びに配列されている。そうすると「何事か」の句も、「人の詞によつて何が漏れてしまったのだろうか」の意の雑の句であると見た方がよく、一句としては恋ではないが、恋の呼び出しとして機能しているものと思われる。それでも、宗砌の句で恋に転換させたことにはなるが、この「三句め」は、寺島氏の言う主題（素材）に関わる性質のものではないと思う。その意味するところを知る手掛かりは、兼載の「何事をも人はひはんする物なればなり」の一言にあると考えるからである。付句は、一句では「逢おうが逢うまいが、浮き名は立ってしまったなあ」の意である。前句に付くときは「逢おうが逢うまいが同じことよ、人は何かにつけ噂をするものだから、結局、浮き名は立ってしまった」という心持ちである。このとき、前句にあった「一体何が漏れたのだろうか」と詮索する気持ちだが、付句によつて超越されてしまつていることに注目したい。

『聖廟千句』第一種注に「三句めの付やうおもしろく侍るか」と評される付様も、これとよく似た発想に基づいて

いる。

六 13 山風の雲も契もとどまらで

14 いづくの峯に花をたづねん

15 うらやまし心のどけき世捨人

まへ句は、いかなるみねの花をかたづねんと、たづねたる心なるを、付所は、いづくにもよもたづね侍らじ、花にもしうちやくせぬ世すて人のうらやましき心かなと也。三句めの付やうおもしろく侍るか。

前句は打越に対して、「どこの峯に花を訪ねようか」と、「たづねたる心」で付いているが、付句が付くと、「どこの峯にも花を訪ねまい」の意になる。前句の疑問を反語に取りなしているのである （十一）。

さらに、兼載の『連歌延徳抄』（十二）にも、「前句の心をあらぬ心に取なしたる」作例の一として、

いづれの峯かすみよからまし

尋じよ此世の外もなきものを

の付合があり、「いづれの峯の句は、前は尋ねたる心也。然を、いづれの峯も住よかるまじければ、たづねじよ、と付なしたる也」と説明されている。「前句の心をあらぬ心に取なしたる」付様は、兼載が「此体、上手の好侍るにや、当座も面白く、利根にも見え、輪廻もせず、殊勝の付様也」と絶賛しているものである。

宗砌の「あひもあはずも」の句も、前句の「何事か人の詞にもれぬらん」を、疑問から反語に近い意味に転じた付様であり、そのことが「三句めの句也」という指摘に結びついていると理解できる。打越に繋がる前句の意図を上手く読み替えた、この句に対する評価が込められているよう。

「三句め」の指摘が、a bの素材、cの寄合、本歌本説に関わらず、広く、

d. 打越に繋がる前句の意味を、付句で別の方向に転換させているとき

にも、現れることを確認したが、古注釈の「三句め」の用例の中で特に目につくのは、実はこのdの例である。もう一つ例を挙げてみよう。

二 28 このごろつもる窓のしら雪 長

29 山ざとのうきをとへかしこたへまし 同

30 松かぜをわがことの葉にせむ 長

付心あしくきけば三句めむつかしき也。付所は、山ざとのうきをとへかし、我はいはずして松風にこたへさせむと也。松かぜのかなしきをわがこたへんといへば三句めあしき也。『伊勢千句注』京大国文B本

山里住みの憂さを問われたら、どう答えるか。打越は「窓に降り積もった雪（を見ておくれ。そうしたらここの住み憂さがわかるだろう）」という、山里住みの人の言葉で付

いている。付句もまた、前句の問いに対する返答という付筋で付くが、「言葉で言う代わりに松風に答えさせよう」として、打越と重ならないように変化をつけている。

dの例は、付句が、打越からどのように転じているのかを、その都度検証しなければならない。右のように、古注の説明が懇切な場合はよいが、そればかりとは限らない。古注の「三句め」の指摘に戸惑うのはこのためである。

### 三 「治定」から「あらまし」へ

『聖廟千句』の古注に「三句め」の指摘のある作例のうち、前節で述べたdの、打越と前句の意味的な繋がりを転換させる「三句め」に属すると思われるものについて、検討を行いたい。

まず、「三句め」に関わる問題として、次の句をめぐる諸注の説を見てみよう（便宜上、第一種注と第四種注を①④で示す）。

はださむく山風送り日は暮て

三 12 君こずは又いかにあられむ

① ころもでに山おろしふきてさむきよを君きまさずはひとりかもねん、の心也。

② あつ衾（アツマフ）などやがしたにねたれども君としねばはだへ

さむしも いまだ暮ぬさきに云たる心也。

③ 日のまだ暮ぬ時分を云たるなり。(同上)

④ (注ナシ)

(傍線は引用者付す。以下同)

① の引歌(万葉集・三二九六、新古今集・一二〇八)は、山嵐が寒々と吹きつける中、女が恋人の訪れを待つという設定の共通、「君こそは」と「君きまさずは」の言葉の類似と言ひ、この句の本歌として容易に認め得るものである。付合を解釈すれば、「山嵐が肌寒く吹き下ろし、日は暮れてしまった。この上、あなたが来てくださらなければ、私は耐えることができないでしょう」となる。第一種注を見る限り、この句は、本歌に則した素直な付様であつて、取り立てて問題はないように思われる。

ところが、第二種注、第三種注は、傍線部に見る通り、この句が日が暮れる以前の句であることを揃つて主張しており、いかにも不審である。この解釈は、前句の「日は暮て」という本文を前提にして成立し得るのだろうか。また、日の暮れる以前とは、昼間に恋人の訪れを待っているというのであるうか。

同様の記述は、第二種注において他にも見られる。

音羽川をとばかりする日は暮て

八22 いくつか人めのせきもこえまし

② 日は暮て、いくつか人めの関はこえんと也。日の暮ぬ先

に云たる心也。昼は人目のしげき也。三句め也。

さむき日の山をはるく／＼里にきて

九36 やどりかさずは身をいかにせん

② 里に舍かさずはかひなし、山にねよと云心也。いまだ里にはこぬ也。山にていひたる詞也。是も三句め也。

③ 三句め大事也。

傍線部は、前句に「日は暮て」「里にきて」とあるのを、付合全体として解釈するときには、まだ暮れていない、里に来ていないものと見なすように注意を促したものである。その主張には、何らかの根拠があるように思われる。また、二句共に「三句め」の指摘を伴っていることも見逃せない。

兼載の『連歌延徳抄』は、連歌は百韻の移行よう次第で良くも悪くも聞こえるものだから、輪廻したり、同じような付け方に終始してしまわないためには、種々の付様を心得ておく必要があるとして、その技法を解説したものである。その中に、問題の核心に迫る記述が見られる。

見ばやと思ふ秋のうらく／＼

さやかなる塩干の月に舟さして

行べき道かいざや帰らん

雲かかる尾上の雪をふみ分て

此二句は、付所はあらましごと也。一句は治定したる

句也。此体もあり。

「治定」は、「てにをは」の用法を説明するときによく使われる語で、表現された事柄が確定していることを意味する。ここでは「あらまし」と対になっている。兼載の説明に則して解釈すると、「さやかなる」の句は、一句では、現に舟をさしている様子を詠んだ、「治定したる句」である。前句に付くときは「舟さして見ばや」と一続きに読み下し、「舟さす」という行為は「あらましごと」で、実際には舟をさしていないことになる。

同じく「雲かかる」の句も、一句では雪を踏み分けて歩んでいる様子だが、前に付くと「雪をふみ分て行べき道か」、雪を踏み分けて行けるものだろうかと、山を前にして自問し、いや辞めて帰ろうと自答して引き返す体となる。この句は、『連歌延徳抄』よりもさらに多くの付様を集成した、宗長の『雨夜記』<sup>(213)</sup>にも引用され、「引合ては、高山の雪を踏分てはいかでかゆかん、いざ帰るべし」となり。一句は、山路の雪を踏み分けたる心なり」と説明されている。

『雨夜記』は、「前句付句引合すれば心ひとつにて、付句ばかり引放ては、心別になる句」の項目のもとに、これと同じ付様の作例を、あと二つ挙げている。

夜なく／ねばや花の咲かげ

梅が香の霞める月を袖にみて

前句に引合てはねがひ也。一句は、梅の匂ひにかすめる月を袖に宿して見たる心也。

(中略)

いづると見れば帰るつり舟

沖なかの小島に海士の家ありて

引合ては、沖の小島に海士の家ありて、其家より出る舟かと思れば、家はなくて、こなたへ帰る釣舟成けり、と付たり。一句は、小島にも家の有けるよと也。

「沖なか」の句は、宗春（兼載）の句である。沖合に見える小島に舟が浮かんでいるのを見て、ああ、あの小さな島にも海士が住む家がある、釣りに出ているのだな、と思えば、舟はみるみる小島を通り過ぎ、こちらの浜へと向かってくる。そこで初めて、海士の家など無かったのだ、この浜から出た釣舟が戻ってくるところだったのだと気づくという体である。いかにも機知的な付けではあるが、「家ありて」と治定する一句を、そのまま受けると見せて、最後には「家はなかった」と逆転してみせるという意外性を狙った句である。

いま、宗長の解説に導かれて解釈してみたが、「治定」を「あらまし」に転じる付句の技法があることを知らなければ、常のように「家ありて」を「治定」のままで解釈していたかもしれない。例えば「沖中の小島に海士の家があ

つて、出漁したかと思うとすぐに島に帰ってゆく釣舟」というように。これでは、兼載の工夫の一句も面目を失ってしまう。

「梅が香」の句の場合はどうだろうか。この句について、『竹聞』は「あらまし」ことの句也。前句と一句と別々の句也」と、宗長と同じ方向で解釈している。すなわち、一句では「梅の匂ひにかすめる月を袖に宿して見たる」現実が、前句に付くと「あらましごと」になってしまい、眼前に月を見ていないことになる。もし、この付合にも眼前の景というものがあるとすれば、昼間の梅を思い描くより他はない。日の光の中で梅を眺めながら、月の光の下ではどんなに美しいことだろう、夜な夜なこの花の下で、袖に月を映して寝たいものだ、と思いを馳せているのである。

一方で、この付合は、「月を袖にみて」を「治定」のままで解釈することもできる。梅が香に霞む月を、いま袖に映して見ている、その美しさに惹かれて、今晚に限らず「夜な夜なねばや」と願う体である。むしろこの読みの方が、理屈に偏らず、付合の景色も美しいと言えるかもしれないが、兼載も宗長も、そのようには読まなかったのである。

『連歌延徳抄』と『雨夜記』に見る、以上四句の外形的な特徴を窺うと、付句が「て留」であり、いわゆる「かけてには」の要領で、付句の句末を前句の句頭に繋げて読む

仕掛になっている。前句には、願望の「ばや」、推量の「べし」、条件の「ば」があり、これらの語が「て」の動詞を受ける働きをしている。こうした条件のもとに、一句では治定する「て」を、付句で「あらまし」に取りなす技巧が成立している。この付様を、いま仮に「あらまし」の付様と呼んでおく。

先に問題にした『聖廟千句』の例を、再び挙げてみよう。

はださむく山風送り日は暮て

三十二君こずは又いかにあられむ

音羽川をとばかりする日は暮て

八十二つか人めのせきもこえまし

さむき日の山をはるく里にきて

九三十六りかさず身はいかにせん

ここでは「て留」の句が前句になっているが、付句の方に、条件の「ば」、推量の「まし」があり、構造は「あらまし」の付様と一致する。第二種注の「日の暮ぬ先に云たる心也」、「いまだ里には来ぬ也」等の記述の意味するところは、もはや明らかである。

しかし、「梅が香」の句と同様に、この三句もまた、「て留」を治定のままとして、すなわち日が暮れた後の体、里に來た後の体として、自然に解釈することができる。現に、第一種注や第四種注は、「あらまし」の付様には言及して

いない。それでも、千句の作者である兼載が、『連歌延徳抄』において「あらまし」の付様を一体として認めている以上、同じ構造を持つ右の三句も「あらまし」として解釈すべきなのであろうか。もしそうであるとすれば、そこには、第二種注、第三種注が指摘する「三句め」の問題が絡んでくるに違いない。

#### 四 「あらまし」の付様と「三句め」

「君こずは」の句を打越からの三句の渡りで見えてみよう。

三 10 里の砦にやどやからまし

11 はださむく山風送り日は暮て

12 君こずは又いかにあられむ

前句と打越は、「かけてには」の要領で、「はださむく山風送り日は暮て里の砦にやどやからまし」と、あたかも一首の歌のごとく繋げて読むことができる。そして、前句と付句も、いわゆる「うけてには」の要領で、前句から付句へと一続きに読み下すことができる。この時、「あらまし」の付様を採用しなければ、打越と付句は、「日が暮れて、宿を借りようか」、「日が暮れて、あなたが来なければ」と、日が暮れた後の行動や事態という同じ発想に寄り掛かつて付くことになる。これは行様の上で望ましいことではない。

例えば宗牧の注に、次のような「三句め」の指摘がある。

12 玉ゆらたのむ夢をやはみん 同(雪)

13 明ぬまの名残はかなみ枕して 牧

14 いざよふ月をことののはの末 同

此三句めむつかしき所也。前は別而以後事也。此句はやうく別とする人に対して、空も明やらず。月もいまだいざよひ候ぞなど云詞のはかなき由也。いざよひのかはりめにて輪廻せば、のがるゝ物とぞ。ましてしばしまだよは深し長月の有明の月は人まどふなり か様の面影也。 『住吉法樂何船百韻注』

12 13 の付合は、きぬぎぬの別れの後、名残を惜しんで、せめて恋する人の夢を見ようと又寝をする様子。13 句は、一句だけで見ても、いかにも恋人と別れた後らしい風情であるが、これにまた別れた後のことを付けると輪廻になる。「三句めむつかしき所」と言われる所以であるが、宗牧は「いざよふ月をことののはの末」と付けて、別れる素振りを見せる相手を、「月もまだ沈んではないい」などと言つては引き留めている様子とし、別れる以前のことに取りなしている。

このように、恋の句で、打越も付句も別れた後のことを付ければ、当然、輪廻として咎められるわけである。「君こずは」の句は、素材を旅から恋へと展開させてはいるが、

「はださむく山風送り日は暮て」の前句自体は、付句が付くことで何ら意味が転換するわけでもなく、新しい意味が付加されるわけでもない。前句の意味はそのままで、打越にも付句にも日が暮れた後の事が付いている。その点ではやはり輪廻気味であると言えよう。

しかし、「あらまし」の付様で解釈すれば、「いまだ暮ぬさきに云たる心」となり、前句の意味を容易に転換することができる。すなわち、山風が寒々と吹き下ろす、まだ暮れやらぬ時分に、「日が暮れてあなたが来て下さらなければ、その時は私は耐えられない」と言っていることになる。「君こずは」の句は、前句との二句一連に限定して読めば、「日は暮て」を治定のままで解釈する方が自然であるように思われたが、こうして三句を見渡してみると、「あらまし」の付様を採用すべき必然性があつたことが知られる。総じて「て留」の句は、「て留」の句を挟んで打越と前句が、ともに「くした後、くする」という付け方になりやすいものである。打越と付句が、ともに前句を承けて事後のことを読めば必ず輪廻になると言うのではない。ただ、打越も付句も事後のことを読む付筋に依存し、その上、前句に何ら新しい解釈が施されないとしたら、それは輪廻と見なすべきであろう。そのようなときに、前句の「治定」を「あらまし」に転じる、「あらまし」の付様が有効なの

である。

「やどりかさずは」の句にも、「君こずは」の句とほぼ同じ事情を読み取ることができる。

九 34 小鳥もみゆる雪の朝あけ

35 さむき日の山をはるく里にきて

36 やどりかさずは身をいかにせん

打越と前句との関係では、里に來たのは小鳥であるが、付句が付くと、旅人のことになる。このように、打越と付句とで「はるく里にきて」の主体が読み分けられているのだが、それでも第三種注は「三句め大事也」と指摘している。主体を変えて付けても、同じように里に來た後の体を読めば、輪廻になるということなのだろう。そこで、「里にきて」を「あらまし」と見なし、いま山中にいる旅人が、「この寒い日に、山を下つて里まで行つたとして、もし宿を貸してくれなかったら、どうしよう」と里に下ることを躊躇している体と解釈しておく。

また、第二種注に「三句め」の指摘のある次の句も、「あらまし」で解釈すべき例である。

三 46 あらぬけしきぞ人にみえたる

47 物のけの古き恨をいひ出て

48 こゝろにすてば罪やなからん

② 云出て心に捨てと云心也。恨有事を云出て、罪を捨て

と〇也。三句め也。

46 47は「物の怪が取り憑いた人は、積年の恨みを言い立てて、いかにも尋常ではないように見える」の意。47 48は「心の内に積もった恨みを、口に出して外に捨ててしまえば、罪というものはなくなるだろう」の意である。

この他、『聖廟千句』の中で、「あらし」の付様を用いてると判断されるものを、三句の渡りで挙げてみよう。

一 90とを嶋国に住もこそせめ（あらし）

91あさなぎに四方の浦行舟をみて

92戸ぼそをだにもとぢぬ蘆の屋（治定）

五 26とま屋の内にかくれすまなむ（あらし）

27さむき日はひろふ爪木をおり焼て

28ながめぬ雪のおしき山のは（治定）

五 75またるゝ文のかへしをもみず（治定）

76しのぶれば心ひとつにをしこめて

77恨をすてよまじはりの道（あらし）

八 28たゞときのまも花にむかはん（治定）

29秋の野の草の庵を立出て

30又たが里の露にねなまし（あらし）

八 54我やどとはぬうぐひすのこゑ（治定）

55かすみつゝ有明のこる山にねて

56たびのつらさをいつか忘れん（あらし）

八 62もろこしまでも行人ぞある（治定）

63法のためむなしき海に舟うけて

64さとれなにはのよしあしもなし（あらし）

九 72野ちの行ゑを誰にとふべき（あらし）

73水清き澤のほとりに駒とめて

74ながめわたせるよもの山々（治定）

これらの句に対して、第二種注は「あらし」であることを前提にした解釈を行っている。いずれの句も、「君こそは」の句や「やどりかさずは」の句などよりも、「あらし」と「治定」の対比がはつきりしており、注者にしてみれば、「三句め也」「未だくせぬ也」等と述べ立てるまでもなかったのだろう。例えば、五 26は、「おり焼てすまなむ」という「あらし」で、寒い日であろうと爪木を拾って暮らしを立てなければならぬ賤の心中を、この爪木を焚いて、暖かい苦屋の内に籠もりたいものだ、と詠む。すると今度は「おり焼てながめぬ」という「治定」に転じ、爪木を折り焚くことに勤しんで山の端の雪を眺めようともしない、心なき山賤の姿を詠む。

こうして並べて見ると、前を「あらし」で付ければ後ろは「治定」、「治定」で付ければ「あらし」という兼載の意図を感じる。第二節で見た「いづくのみねに花をたづねん」のような問いかけの句を、疑問と反語に読み替える

技法に加え、「て留」の句を「あらまし」と「治定」に読み替える技法も、兼載の「三句め」の転じようのレパートリーの一つであつたと言えよう。

## 五 「て留」の前後

「て留」の句の前後が、事後のことを付ける付筋に偏向せず、前句に新たな意味を与えて展開してさえいれば、「あらまし」の付様は必ずしも採用する必要はない。

第三節に示した「あらまし」の付様の構造を持つ三句のうちの残る一つ「いつか人め」の句について考えてみたい。

八 20 木ず多にちるや瀧の岩浪

21 音羽川をとばかりする日は暮て

22 いつか人めのせきもこえまし

① 恋也。人めの関名所にあらず。人めをせきにする也。

付所はあふさかのせきの心也。本歌、をと山をとにきゝつゝあふさかの関のこなたにとしをふるかな

② 日は暮て、いつか人めの関はこえんと也。日の暮ぬ先に云たる心也。昼は人目のしげき也。三句め也。

③ ならびの名所也。

④ 音羽川おとにきゝつゝ相坂の関のこなたに年をふる哉  
付ては、相坂の関を人目の関にとりかえる。人目の関、

名所にあらず。

まず、20 21は、「梢に散っているものは、瀧の岩浪の飛沫だろうか。音羽川は夕闇の中で音ばかりして、瀧の姿は見えないけれども」の意で、日が暮れて視界が遮られたという発想で付いている。第二種注は、そこにまた、日が暮れた後の体を付けると輪廻になると考えたのであろうか。

「日は暮て」を「あらまし」に取りなすよう促す。②の通りに解釈すれば、「今はまだ日が高く人目も多いが、早く日が暮れて、あの人に逢いに行きたいものだ」とでもなるうか。

しかし、①④が指摘するように、22句は、前句にある音羽の地名から、これに近接する逢坂の関を連想し、逢坂の関ならぬ「人めのせき」と表現したのである。「人めのせき」とあるのは、逢坂の関が念頭にあるためである。そして、逢坂の関、音羽、音、恋という条件が揃えば、「をと山をとにきゝつゝあふさかの関のこなたにとしをふるかな」（古今集・四七三・元方）の歌を踏まえないわけにはゆかない。そうすると21 22は、「音羽川ではないけれども、あなたのことを音（噂）に聞くだけの日々は暮れて。逢坂の関を越えるのはたやすいことだけれども、いつか人目の関をも越えたいものだ」（<sup>二十四</sup>）の意になる。このとき、前句の「日は暮て」は月日の経過の比喻であつて、陽が沈

んだことを言うのではない。また「をと」も、物音から噂の意に転じている。①④の方向で解釈すれば、輪廻になる恐れは全くないのである。

また、前後の展開や句形の上でこれとよく似た、

一 16 風こそおつれ山のした水

17 松の葉のつれなき色に秋暮て

18 いづ花すゝきなびくをもみん

18 句について、第二種注はやはり「三句め也。秋暮ていづとねがふ心也」としているが、この句も、特に「秋暮て」が付筋となつてゐるわけではなく、「あらまし」で解釈する必要はない。17 18 は「松の葉が色を変えないように、あなたはつれない態度のままで、秋も暮れになった。いまこの季節、花薄が靡くように、いつかあなたが私に靡いてくれるのを見たいものだ」の意である。

第二種注は、兼載が付様の一体として用いている「あらまし」の付様の存在を知る契機とはなつたが、一方で、この付様に固執する余り、正しい解釈の方向性を見失つてゐる面もあることは否定できない。

ところで、『聖廟千句』には、「て留」が、百韻におよそ十三回の頻度で現れる。「て留」の句が、一面、輪廻に陥りやすい危険性を持つてゐるとしたら、「あらまし」の付様の他に、兼載はどのような工夫を凝らして、三句めの展

開を計つてゐるのだろうか。

三 96 そのゝこてふのよそにとぶかけ

97 春の日ののどけき友にさそはれて

98 かすめる山よいくかきぬらん

例えば、この三句は、「て留」を挟んで前後に繋がつてゆく付様であり、前二句は、園の胡蝶が、よその蝶に誘われて飛んでいく様、後二句は、友人に誘われて春の山に来る様と、主体は変わつてゐるが、どちらも誘われた結果の行為で付いてゐる。一見、輪廻気味のようにも見えるが、そこには何かの工夫があるはずである。

そこで、第四種注の指摘する「三句め」の例を参考にして、考えてみたい。これは、「て留」の後の句を「三句め面白き」と評した例である（二十五）。

五 82 野中の水にほそき月影

83 小萩さき薄ほのめく秋はきて

84 露よりむしの乱たるこゑ

④ 是は三句め面白きとなり。

前二句は、夏の暑さもつい昨日のことと思われる時節に、七月三日頃の細い月を見つけて、初めて秋の訪れを知るという趣向である（「三日月の光ほのかにみゆるより心をつくる秋の空かな」夫木抄・三九二、「みか月のほのめきそむるかきねよりやがて秋なる空のかよひぢ」拾玉集・一

三五四等)。このとき、「小萩さき薄ほのめく秋はきて」は、宗祇の正月一日の発句「月の秋花の春たつあした哉」(萱草他)が、月と桜を眼前に見てはいかないのと同じように、萩も薄も眼前にないと解釈した方がよい。小萩が咲き、薄がほのめく、あの美しい秋がやってきたと想いやっているのである。付合の趣向の中心は、あくまで、水に映った月に秋の到来を知るところにあり、それを生かすためにも、野には秋らしい彩りがない方がよいのである。

付句の「露よりむしの乱たるこゑ」は、「露が乱れるよりも盛んに虫が鳴き乱れている」の意である。兼載は、『梅春抄』に「七月渡の発句には、(中略)虫のしのび音も初秋なる体」と記しており、秋が来て間もない頃の虫ならば、恐らく「露よりむしの乱れたる」とは表現しなかったであろう。この付合は、秋が来て、小萩が咲き初め花薄がほのめく頃には遠慮がちに鳴いていた虫も、萩薄が盛りを迎えた今ではしきりに鳴き乱れている、と次第に秋が深まってゆく時間の経過を内包していると考えられる。

82 83では、秋の到来に気づいたその瞬間の感動を捉え、84句で、初秋から深秋に転じる。「秋はきて」という言葉を効果的に取りなした展開であり、そこが「三句め面白き」と評価されているのである。

「て留」の前後の時間を詠み分けようとする意識は、『聖

廟千句』の次のような付合にも窺うことができる。

八 42 ぶりぬる寺にかすむ灯

43 山水の音たえへに夜は深て

44 あすやこほりもむすびさだめん

七 66 冬野の露はなにをたのまん

67 有明の月こそあらめ秋暮て

68 わかれをまねけいなづまの影

五 36 つまどふ鹿のよはる山みち

37 つれなきにあかしくらせば秋深て

38 こしも又やたゞに送らん

例えば、八 42 43 は、現在の夜更けの山寺の景であるが、44 句で「夜は深てあすや」、夜が更けて明日になったらと、夜が更けた後の「あらまし」にもってゆく。次の二例も、一方は現在の暮秋の景であるが、もう一方は七 66 「秋暮て冬野の露は」五 38 「秋深てこしも」と、秋が暮れた後の「あらまし」に展開させている。

これらの付合と比べると、先程の「露よりむしの」の句は、「あらまし」ではなく実際に初秋から深秋に時を進め、しかも、その時間の経過を「あす」「冬」のように明示するのではなく、虫の鳴き声によって間接的に表現している点で、さらに進んだ付け方であると言える。

ここまできて、問題の三句を見直してみると、

96 そのゝこてふのよそにとぶかけ

97 春の日ののどけき友にさそはれて

98 かすめる山よいくかきぬらん

前は、今しも誘われて蝶が飛んでいる様子、後は、誘われてから何日も経過した時点のことであり、打越と付句にははつきりと時間の差がつけられている。一見、輪廻のようにも見えるこの句にも、逃げ道は用意されていたのである。なお、既述の「あらまし」の付様も、「て留」の前後の時間を詠み分けた付様の一つということになる。

『聖廟千句』古注に見る「三句め」の指摘を追っているうちに、結局「て留」の前後の行様のことに偏向してしまつた。しかし、既に述べてきたような「て留」の句の性質を考えれば、それも必然的なことではなかったかと思う。

## 六 おわりに

寺島氏は、先の論文の最後に「付句集の付合に行様を想定しながら読む享受の姿勢が『景感道』『竹聞』という兼載一流の伝書に多く見られることは、『連歌延徳抄』に見られる、行様の中での付合を考える意識と共に問題となろう」と触れ、兼載の行様意識に注意を向けている。いま「三句め」の問題に限定して言えば、宗祇出座の百韻・千句の

古注には稀にしか見られない「三句め」の指摘が、兼載の『聖廟千句』の古注には比較的多く見受けられるという事実がある。そのことは注者の享受の姿勢と不可分の問題であるが、作品を通じて、兼載自身の「三句め」をめぐる意図をも読み取ることができたのではないかと思う。

幕末の連歌師坂昌成は、兼載の句風を「老葉・下草此兼載の句集なりのやすらかなる姿にはあらで、是は又、人のおもひよるまじき、あやしくめづらかなるふしぐをいひ出し、上手なりけり」(兼載法橋伝)と評している。「人のおもひよるまじき、あやしくめづらかなるふしぐ」という言葉は、兼載が『連歌延徳抄』等で高く評価している「前句の心をあらぬ心に取な」す付様を想起させるものである。この付様は自ずと三句めを離れることにもなる。そして、人の意表をつくような付様は、兼載の師、心敬が得意としたものでもある。兼載が、「三句め」の技法を前代からどのようにに継承発展させたのか、また、しばしば対立的に捉えられる宗祇の連歌と比べてどのような違いが見られるのか、という点は今後の課題として残されている。

## 《注》

(一) 中世の文学『連歌論集』四(三弥井書店、一九九〇年)に拠る。

(二) 金子金治郎『連歌古注釈の研究』(角川書店、一九七四年) 研究編総論。

(三) 注(二) 書の研究編各論「聖廟千句注の四種」に解説がある。注釈本文の引用は、第一種注は俳書叢刊第七期二『兼載独吟千句註』(天理図書館、一九六二年)、第二種注は注

(二) 書、第三種注は山口県文書館多賀社文庫蔵本の紙焼写真(国文学研究資料館)、第四種注は国立国会図書館蔵連歌叢書第四十六冊の紙焼写真に拠る。また、千句本文の引用は、尊経閣文庫蔵本の紙焼写真に拠る。

(四) 桂宮本叢書第十八巻『連歌』一(養徳社、一九五四年)に拠る。

(五) 『連歌貴重文献集成』第十集(勉誠社、一九八二年)所収「雑袋」に拠る。

(六) 注(二) 書に拠る。

(七) 古典文庫『二根集』上の二七八頁。

(八) 「ともし」と宮城野の寄合は、『連珠合璧集』や『浅茅』が挙げている。「ともしするみやぎが原のした露にしのおもちずりかわくよぞなき」(堀河百首・四一八・匡房)に基づく寄合である。

(九) 注(四) 書に拠る。

(十) 『住吉法楽何船百韻注』は、31句の注に「信のなる千くまの河のさゝれ石も君しふみなば玉とひろはん」(万葉集・三

四一八)を引き、「此本歌のよせ、かたがた珍重なる物なり」と記している。

(十二) 『聖廟千句』の古注には、本歌本説で付けた後の三句め用例として、次のようなものがある(第一種注より第四種注を①～④で示す)。

十 49 かすかなる里にも春やいたるらん

50 やぶしわかねばむかふ日のかげ

51 我をのみへだつる人もうらめしや

①、三句め也。恋にとりなせり。日のひかりをわく事はなきを、人はへだつると也。

五 89 皇の三を其代のはじめにて

90 くすりの草葉種はつきせじ

91 五月来て猶深くなる野べの色

④ 五月五日に百草をとる心也。一句はしげりたる野也。三句め是也。

(十二) 注(四) 書に拠る。

(十三) 『連歌俳諧研究』第七十四号、一九九八年三月。寺島樵一『連歌論の研究』(和泉書院、一九九六年)に収録。以下に引用する寺島氏の説はすべてこの論文による。

(十四) 注(二) 書に拠る。『竹林抄』(新日本古典文学大系『竹林抄』では、付句の初五は「まどろむを」である。

(十五) 貴重古典籍叢刊二『竹林抄古注』(角川書店、一九七〇

年)に拠る。

(十六) 寺島氏は「この三句目大切の所とは、続いてきた恋句を離れるための適切な三句目の付合が難しい所で、という意味と思われ」とするが、ここでは恋という素材が問題になっているのではないと考えた。

(十七) 注(四) 書に拠る。

(十八) 『聖廟千句』第四種注に見る次の指摘も、前句を反語から疑問に転じたところが評価されていると見る。

九 71かたぶきて草かるをのこかげさびし

72 野ちの行ゑを誰にとふべき

73 水清き澤のほとりに駒とめて

④三句め面白也。

(十九) 注(一) 書に拠る。

(二十) 『京都大学蔵貴重連続歌資料集』第四卷下(臨川書店、二〇〇四年)に拠る。

(二十一) 論の展開上、触れることができなかった『聖廟千句』の「三句め」の用例を以下に挙げておく。これらは、打越と前句を結びつけていた発想を付句で転換させた句である。

二 26身をかずならずたれさだめけん

27のぼる道なくてはてめやくらゐ山

28ひたすら雪に跡たゆる宿

①三句めのやり句也。のぼる道なきといふに雪に跡た

ゆると付られたるばかり也。

二 51古寺の橋の下水露立て

52みちはほのかにつたふ岩がね

53のる駒やはるけき山によはるらん

④旅也。三句目面白き也。

三 57恋よなど思し道にまどふらん

58なみだの川のわたりしらばや

59こぎ出ぬ身の浮舟は哀にて

④三句目面白き也。(注の位置、推定による)

四 60あはれおほきは恋ち成けり

61春秋をあらそひこしもはかなくて

62かすみも霧もあらし吹ころ

④三句目あらぬ付様也。

(二十二) 第三種注は、注釈本文の位置が、千句本文に対応していないため、私に順序を正した。

(二十三) 注(一) 書に拠る。

(二十四) 「いつかまし」は、「いつになったら…だろう」のよ  
うに訳されることが多いが、22句を「いつかたい」と訳  
したのは、次の23句「戸ざして又かへすこそうらみなれ」  
が付くと、22句は明らかに「一体、いつになったら…だろ  
う」の意になるためである。兼載は「いつかまし」を、  
強い願望から、実現を危ぶむ疑問に転じているものと思わ

れる。後掲の一18「いつ花すゝきなびくをもみん」も、17句「松の葉のつれなき色に秋暮て」に付くときは願望、19句「いたづらにおもひ入野々露深み」に付くときは反語に近い疑問になる。1718については、②「秋暮ていつとねがふ也」③「松のはのやうに難面人の花薄のうに引をいつかみんと願たるなり」と、古注にも願望の意であることが示されている。「いつ（か）……ん（まし）」を願望と疑問（反語）に使い分けるのも、「三句め」の技法の一つであろう。『竹林抄』の次の句も、そのように解釈すべき例であると思われる。

思ひあまるをいつか知られん

枕かる野路の篠原月待ちて

能阿

前句は恋の句で、「私がこんなに思いを募らせているのを、あの人はいつになったら知ってくれるのだらう」と、恐らくは反語に近い意味合いで打越に付いていたと思われる。付句が付くと、人に知られるのではなく「月ニイツカシラレン」『竹間』となる。「思ひあまる」のは月を待ち望む思いである。その思いを月知ってもらえるのは、月が出てきたときである。従つて「いつか知られん」を、疑問や

反語で解釈するのは不自然であり、早く知ってもらいたいという願望の気持ちで解釈するのがふさわしい。

(二十五) 他に、次のような例がある。

四 夢にも袖はぬるゝならひぞ

37 別にし宮こ恋つゝ旅ねして

38 うちながむれば浦のもしほ火

④ 三句目、さらにく。(注の位置、推定による)

九 20 難波のあまや冬こもりする

21 蘆づゝのうすき衣を身にかけて

22 夏のやどりぞそよぐ風まつ

④ いひかへる三句め、面白なり。

本文中に引用した和歌は、すべて新編国歌大観に拠る。引用文には、私に句読点、濁点等を施したものがあ

〔付記〕本稿は、平成十六年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（はせがわ ちひろ・日本学術振興会特別研究員）